
広イセカイと狭イテノヒラ

北田 龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

広イセカイと狭イテノヒラ

【Nコード】

N74390

【作者名】

北田 龍一

【あらすじ】

「少女」は、彼のようになりたいと願った。「異端」は、歪な人を憎んだ。「罪人」は、償うべきだと自らを律した。「凡人」は、平凡に生きていることを嫌った。「混血」は、ただ世界に震えた。「騎士」は、己の師を超えることを望んだ。「鬼」はすべてを見守ると決めた。

これはそんなモノたちの、日常と、非日常の物語。

……初の投稿となるので、拙いところもあると思いますが、どうか楽しんでいってください

一章 桜の散った学園にて（前書き）

はじめまして？ 作者です

今回が初投稿となるので、いろいろ見づらいかもしれませんが。

また、小説ド初心者なので誤字脱字などがある可能性があります。

なので、生温かい目で見ていただければ幸いです

あと、まずいなと思います、「この小説見たことあるような…」

…？」という方は、あとがきを見てくださいね

さて、前振りが長くなりましたが、そろそろ本編始めます

どうぞ！

一章 桜の散った学園にて

「彼」に会ってから10年以上たった

それ以来一度も会ってない

だって、「彼」と私は他人だから

「彼」はもう、私のことなど忘れてしまっているのかもしれない

私も記憶が曖昧で、よく思い出せない

それでも「彼」を探したい

会って、「彼」に私の

若葉のみとなった桜が下校していく生徒たちを見下ろしていた。

少しだけ赤みのかかった日差しが、学校全体を包み込む。

その校舎の窓辺に一人、男子生徒が目を閉じて座っていた。

すう、と背筋を伸ばし膝に手を置いたまま。

彼がもし座禅を組んでいれば、瞑想に見えただろう。慰霊碑の前

だったなら、黙祷を捧げているように見えたかもしれないが……し

かし、彼は何者にも祈りを捧げてはいない。誰もいない教室で凜と、

眼を閉じたまま座っていた。

その空気を 静寂を破るように、教室の戸が開かれる。

現れたのは別の男子生徒。気まずそうに、困ったように扉をあけ

た。

「私に何用だ？ 先に言っておくが、荒事は先週やったので断るぞ」

座っていた男は振り向きもせず、ゆっくりと目を開いて答えるの

であった。

彼が扉を開く前、ホームルームの鐘が鳴ったところ
授業から解放されたクラスメイトを尻目に、彼は
悩んでいた。

大仏駿也おだいらきしゅんや

食堂で昼食を摂ろうと廊下を歩いていたところ、必死になって部員勧誘をしている女子生徒を見つけたのが、この悩みを抱えるきっかけである。話を聞いてみるとどうやら彼女はオカルト研究部の者で、このままだと部員の数が足りないため部がとりつぶされてしまいうらしい。

彼女を助けるために、とりあえず自身は入部することに決めたのだが、それでも人数が足りない。友人に当たってみたものごとくとく断られてしまった。

既に駿也は二年生。大半の者は他の部活動を行っているため、協力しようにも時間がとれないとのことだめだった。時間に余裕のある帰宅部の人間にも声をかけたが、「オカルト研究部」と聞いた途端みな敬遠してしまう。誰一人新入部員をつれていけないまま、ホームルームが終わろうとしていた。

ただ……まだ同学年で一人、誘っていない人物がいる。何故声をかけなかったかというと、彼を誘っても断れると思っていたし、何より彼は有名すぎたからだ。

その人物の名は、「酒月さかつき 日明あきひ」という。付いたあだ名は「鬼神」、「現人神」、「生きた図書館」など他多数があり、挙げていたらきりがないだろう。喧嘩は無敗。昔、日明一人に対して四十人ほどが集まり戦いを挑んだにもかかわらず、日明はその四十人を一人残らず蹂躪したらしい。他にも、ほとんど机に突っ伏しているにもかかわらずオールだったりと、頭もどうかしているんじゃないかと言われている。彼は昔、さまざまな部に入って活動していたのだが一か月と経たないうちにやめてしまい、今はたまに助っ人として動いているようだ。理由は「真剣にやれるほど興味、及び関心を持ってない。要するに飽きた。たまになら協力してもいい」と言っていた。一年生の時、日明とは同じクラスでよく話をしていたが、正直な所、

日明が部に入ってくれるとは思っていない。彼は関心のあることが、利益になること以外は行わない性格なのだ。彼の姿を何度も見ているので、駿也はそのことを理解している。しかし何もせずに諦めることもできず、下校していく生徒の流れに逆らうように、日明のクラスに足を運んだ。

物音ひとつない教室に、開かれた戸の音が反響する。窓際の席で、目を閉じて座っている人物が目に入った。彼の髪はやや乱れているが、それとは対照的に制服は乱れ一つない。

間違いない。彼こそ酒月 日明だ。

「私に何用だ？ 先に言っておくが、荒事は先週やったので断るぞ」
彼が言葉を発した瞬間、教室の空気が変質した。急に重みを持つたように、ソレは駿也にふりかかる。ただの『気迫』なのだが、顔を見ていないのに駿也は僅かに気圧けおされた。

「……相変わらず威圧するんだな、日明」

最も駿也はこれに慣れているため、多少なら問題ない。今のは強面の人と対峙した時ぐらいの重圧だろう。平穏な空気に比べれば重いが、殺気まではいかない。

「相手がどれほどの覚悟で私に頼みに来たのかがわかるからな。まあ、貴殿は慣れてる故ゆえあてにならないが……何用だ？ 駿也」

顔を見ずに名前を当てたり、言い方が古くさいかつたりと、日明の感覚は常人とはだいぶ離れている。どこの武士だよ！？ と内心つつこみつつ、一息ついてから駿也は本題に入った。

「ある部活に入って欲しい。ずっといなくてもいい！ とりあえず今のままだと部が潰れちまうから、人を集めねえとつてだけだ。オレも入ることにしたんだけど、それでも人数が足りなくて……」

ふむ……と日明は思いふける。少しの沈黙を経て、困惑しながら彼は言った。

「いったい何部だ？ 早急に部員を追加しなければならぬ部は、私の記憶にはないのだが……」

「オカルト研究部だ。日明が知らないのも無理ないぜ？ オレも今

日、声かけられて初めて知った」

渋面のまま、日明は言う。

「初めて知った部にそのまま入るとは……誘ったやつが駿也好みだったのか？」

「違いえよ。放って置けなかったただけだって」

淡々と答える駿也に、暁が薄く笑った……ような気がした。

傍から見たら、口を吊り上げているようにしか見えないだろう。

少しも付き合っていないければ、警戒したかもしれない。歪な表情ではあるが、普段あまり感情を表に出さない日明の数少ない「表情」

だ。ちなみにこの表情は軽くからかっているか、少しふざけているかである。

「無意識に好きになっているのかもしれないぞ？ 始めはそんなもんだ」

「興味ないんだけど……そういうの」

二の句を継ごうとして、駿也は話が逸れていることに気がついた。こんな話をしに来たのではない。風呂から出た犬のように首を振ったあと、改めて日明に頼んだ。

「それはともかく暁、オカルト研究部に入って……」

「了解した。では案内を頼む」

即答で了承する日明。

「そうだよな。やっぱ無理……っていいのかよ!? ちょいと怪しい部だぜ!?!?」

てつきり断られると思っていた駿也に対し、日明は無然と答える。

「少し怪しいぐらいがちょうどいい。面白そうだ。お前の嫁に会うのも楽し……」

「その話から離れるおおおお!!」

廊下にも間違はなく聞こえるであろう大音量だったが、幸いにも周囲に人気はなかった。聞かれていたら、あつという間に野次馬に取り囲まれていただろう。

一方日明は、「そこまでムキになることも無かるう? 照れ隠し

か？」と、冷静に切り返す。……どうやら、彼は本気で言っているようだ。

ここで言い合っても埒があかないので、部室である生物実験室に日明を案内しながら、二人は話を続ける。だが、話題は嫁がどうか、恋とは何ぞやらなど、男女関係に重点を置いた話題から離れることはなかった。それを必死になって否定する駿也の胸中には、いやな予感がしてきている。

（あの娘に会わせても大丈夫か？ 日明はこの手の話題振らないだろうな！？）

残念ながらこの勘は、後に大当たりしてしまうのである。

桜谷高校、東棟二階

そこには、二つの実験室がある。

一つは化学薬品や実験器具が置いてある化学実験室。もう一つは、ホルマリン漬けや骨格標本などが立ち並ぶ生物実験室だ。

放課後の東棟にはあまり人気がない。実習室しかない棟のため、吹奏楽部が音楽室を使うくらいしか、人が来る理由がないのである。だが今日は……二階廊下の突き当たりにある生物実験室の電気がついていて、もちろん、誰かの消し忘れではない。室内には、女子生徒が二人いた。そのうちの一人が、不安そうに、どこか苛立ったような声を発する。

「遅いですね……何かあったのでしょうか？」

険の強い声色と、第一ボタンまで締められた半そでのワイシャツ。もちろんスカートも長めである。身長は女性にしてはやや高めで、百七十センチはありそうだ。顔には黒縁メガネをキリツとつけている。彼女の姿を一言で表すなら、「メガネ委員長」と言ったところだろうか。

「きつと他の生徒さんたちにも声をかけてくれてるんですよ〜あせ

「つちやダメダメ」

もう一人の彼女は、メガネ委員長とは対照的に明るく楽しげで、それでいて周囲の人間を和ませる雰囲気を持った声だった。

緩やかなウェーブの掛かった茶髪に、大きな二重の瞳。寝癖をそのままで来たような乱雑で、どこか稚気を含んだ髪形。肌は陶磁器のように白く　はないが、年相応には艶めかしい。

「それにその先輩だけじゃ人数が足りてないんでしょ？　だったらここは、レッツ希望的観測！！」

それでいて軽い天然とも取れるこの言動。大半の男は一週間もたないだろう。メガネ委員長の知るよしもないが、彼女はまだ入学して一カ月ほどにもかかわらず、既に三回ほど告白されている。もちろん結果は全員玉砕だ。

「それは、そうなのですが……」

彼女の言った人数が足りてないとは、部活動に最低限必要な頭数のことである。

現在オカルト研究部には三人所属している。堂々と希望的観測を宣言した「木下きのした カエデ」と、メガネ委員長こと「岩上いわがみ 綾花あやか」残り一人は、去年まで部活動を行っていた三年生の先輩である。この先輩は実質名前だけで活動するつもりはなかったのだが、綾花が何度も頭を下げてなんとか部に残ってもらっている。しかし、このままでは二人足りない。最低でも部として動くには、五人以上でなければならぬというのが本校の校則なのだ。

昼休みに一人だけ、入部してくれるという先輩がいたのだが、その先輩はまだ来ていない。時間はもう四時過ぎで、とっくの昔にホームルームは終わっていた。忘れられたのかもしれないも思っているが、それでも綾花は諦めなくなかった。

「そういえばカエデさん。どうしてこの部に入部しようと思ったのですか？」

不安を紛らわすようにカエデに声をかける。もちろん、純粹にカエデの入部理由を聞きたいというのもあった。

「ん〜誘っている綾花ちゃんがあまりにも健気だったもので、つい入っちゃった」

どこか子猫を思わせるしぐさで無邪気に答える。その動作は同姓の綾花も、思わずドキリとしてしまふような可憐さを漂わせていた。「そんな理由でいいのですか？ まあ、私としてはありがたいのですが……って聞いてます!？」

綾花が怒る理由。それはカエデが全力でそっぽを向いていたからだ。気がつけば、廊下のほうに注意を向けていて、こちらの話は全く聞いていなかった。

そしてカエデは唐突に一言

「……こつちに誰か来てる。一人じゃなさそうね」

「え?」

あまりに突拍子過ぎる発言に、綾花の思考が停止する。発言そのものも突拍子だったが、なにより今の口調は彼女らしくなかったような気が……

「遅れてきたバツゲエエエーム! 必殺黒板消し!!」

そういうとカエデは軽い身のこなしで引き戸に近づき、黒板消しを挟み込む。ヒーロー番組の悪役がワナしかけたような笑みをこぼして、ご満悦の様子だ。それと同時に、誰かの足音が廊下側から綾花に聞こえ始めた。

……先ほど違うように見えたのは、綾花の気のせいだろう。

「さあ先輩方、肺に悪いチヨーク粉の黙示録に恐れ慄くがいい!」
「後でどうなっても、私は知りませんよ?」

コツコツと廊下に響く足音を気にしながらも 正確にはこの後の顛末を予測しながらも、綾花は放っておいた。

一方カエデは、今度はタフガイのように渋く言い放つ。

「フツ、これぐらいはご愛嬌さ……それに、この程度のブービートラップに引つかかるようなアマちゃんじゃあ、この先の戦場を生き残れない……これに引つかかった暁あかつきには、潔くこの部から身を引いてもらうぜ!」

「戦場ってどこですか!?　というか部員数が減ってしまったら本末転倒でしょう!」

「やーそうだったね〜ゴメンゴメン。今のナシ!　取り消します!」
そうこうしているうちに　扉が開かれ、黒板消しが落下した。

入ってきた先輩は何の警戒もしていなかったようで、頭の上にポス、と見事なまでに黒板消しが直撃。少しの間、呆然として……

「なんじゃこりゃああああ!?!」

と古臭いリアクションを決める。そして、お気の毒な先輩の裏にいたもう一人が、唐突に顔を出してつぶやいた。

「気がついていなかったのか……しかしこの程度で良かったな。ここがもし戦場だったら、今ごろ貴殿は木っ端微塵だぞ?　駿也」

なんとなく、軽いデジャヴ。原因はこれを仕掛けた天然娘カエデとの会話のせいだろう……。

「気づいてたなら教えてくれよ……!」

一方、黒板消しを食らった先輩の頭は見事にスノーマン化。どんよりと重い空気を周辺に漂わせていた。

それに対して、

「Yes!!　クリティカルヒット!」

この程度のブービートラップ、と言っていたわりにカエデは大はしゃぎで、ガッツポーズをきめている。先輩を舐めているのか、あるいは根っからの天然なのかよくわからない言動だが、おそらくは後者だろう。

静かに片手を掲げてカエデは続ける。

「この出来事はオカルト研究部員の魂に強く刻まれ、未来永劫語り継がれるだろう……!　そう!!　『オカ研の雪男イエティ』として!!」

「意外と普通だな……とはいえ、そんなあだ名で呼ばれたくはないが」

「どこが普通か説明してくれ日明!!」

初対面で悪ふざけしたにもかかわらず、カエデと先輩達の会話は弾んでいる。悪い傾向ではないと思うが、しかし……綾花にとって、

この展開は腹が立った。

既に時刻は四時二十分を過ぎていた。あまり遅くに帰りたくはないし、何より部活届けを受け付ける時間は五時までだ。なんとか人数は揃ったのだが、やらなければならぬことはいくらでもある。にもかかわらず……三人で和気あいあいとしているのは気に入らなかつた。そんな綾花の心情もお構いなしに、三人は話を続ける。しばらくは綾花もこらえていたが……すぐに爆発。身近にあったテーブルに腕を叩きつけた。

走る衝撃。硬直する三人。そして綾花は叫ぶ

「いつまで三流コントをしているのですか！ ここは漫才部ではありませんよ！？」それに、ただでさえ先輩方は遅れてきて時間が押ししてるのです。無駄話はあとにして、部のことを優先してください！！部活届けの受付時間が過ぎてしまったらどうするんです！？」

「ひえっ！？綾花ちゃん怖っ！！」

「わ、悪い……」

唐突に放たれた咆哮に二人は身を震わせた。

しかし先輩の一人は、

「……確かにそのとおりだな。失礼した。では、我々は何をすればいい？」

淡々と物怖じせずに答えた。その動作は全くといっていいほど落ち着いていて、恐ろしいほど 何の動揺もせず、どこか感情が欠けたような表情だったが 理性的な空気をかもし出していた。彼に促され、綾花は口を開く。

「とりあえず、副部長を決めなければいけないので、まずそのことを話しましょう。そのあとで、先輩方にはこの紙に名前を書いてもらいます」

そういつて懐から「入部届け オカルト研究部」と書かれた紙を先輩たちに差し出した。

「ちよつと待つてくれ。副部長の前に部長を決めなきゃいけないだろ。でも、その前に自己紹介しないか？ 相手がどんなやつなのか

もわからないのに、部長とか決めるのはちょっとな……」

未だに残る白い粉を振りまきながら、先輩の一人が言う。そのとおりだと綾花は思ったが……もう誰が部長をやるかは、彼女の中では決まっていた。

「部長は私がやります」

生意気かと思われるかもしれない。何か言われるかもしれない。

それでも……この役目は自分がするべきだ。

でなければ、私は「彼」に顔向けができない。

「え！？」

「理由を聞きたい」

動揺するカエデとスノーマン先輩に対し、やはりもう一人の先輩は冷静だ。淡々とこちらに問いかけてくるその姿は、ぎこちない機械のようにも見える。

（一体何なのでしょう？ この人……）

彼から奇妙な違和感を感じたがそれは問題ではない。綾花は自身を落ち着かせてから、ゆっくりと理由を述べた。

「この部を維持したいと積極的に動いたのは私です。先輩方やカエデさんは……私が行動を起こさなければ、この部には入らなかったでしょう。ですから、私がここで責任を取らないと……つまり部長にならないと筋が通らない。と思いませんか？」

視線を外さずに、彼としっかり向き合って答えた。

「……驚いた。政治家が堂々とマニフェストを曲げる時代に、未だに道理を通そうとする者がいるとは……」

その時の彼の変化は、何と言えはいいのだろうか？ 口調は少しばかり柔らかくこそなっていたが、表情が……誰がどう見ても“顔を歪めて”いたのである。思わず綾花は半歩後ろに下がり、先輩を警戒する。カエデは大丈夫だろうかとそつと視線を移すと……何故か彼女は柔らかい笑みを浮かべていた。

そして、綾花にとつて信じがたいことを口にする。

「綾花ちゃんよかったね！！先輩に褒められよー！！じゃあ先

輩、綾花ちゃんが部長になることに賛成ですか!？」

「そう思ってもらって構わない。貴殿には聞くまでもなさそうだが……駿也はどうだ?」

あつさりと先輩は綾花を褒めたことを認め、スノーマン先輩にも意見を求めていた。

(今の表情で褒められたと言われても、わからないですよ!)

内心怒りを覚えながらも、そこでふと気がつく。

なぜカエデは、彼が『褒めている』ということがわかったのだらう?
う?

「俺も異議なしだ」

彼を連れてきたスノーマン先輩が動揺していないのは分かる。声をかける間柄なのだから、つきあっているうちに解るようになったのだらう。カエデと先輩は知りあいなのだらうか?

「というわけで、オカルト研究部の部長は『岩上 綾花』に決まりました!」

しかしカエデの性格を考えると、知っている人間だったらすぐに声をかけそうな気も……

「あ・や・か・ちゃ〜ん!! 聞こえてる!？」

「え!?! すいません、考え事をしています……何を話していたのですか?」

どうやら気づかないうちに話が進んでいたらしい。先ほどのこともまだひっかかっていたが、それよりも今は部のことを優先するべきだと自身に言い聞かせて、もう一度何の事を話していたかを聞いた。「部長はまかせたって話をしてた。もしかして日明の表情がわからなくて混乱した? あいつは表情を作るのが苦手みたいで……俺も最初は戸惑った」

言っていることは理解できた。できたのだが……今の会話の中にある人物の名が含まれていたせいで、綾花はさらに混乱していた。

「あの、先輩。少し気になったのですが、アキラってまさか……あの人がじゃないですよね?」

表情が欠落していて、男性な上に名前が「アキラ」

その人物には一人心当たりがある。この学校の生ける伝説と化している男とびつたり一致していた。偶然の一致と思いつつも

こんな辺境の部に来るはずはないと思いながらも 恐る恐る、

先輩に聞くと、

「たぶん想像どおりだと思う。クラスメイトや友人に声をかけたけど、入ってくれるやつが日明だけでさ。でも、噂ほど物騒なヤツじゃないから。日明独特の動作とか雰囲気があって、慣れるの大変だとは思っけど」

さらりと先輩は答えたが、綾花は動揺を隠せない。

(無理言わないでください。あの『鬼神』が目の中にいるんですよ!?)

噂によるとたった一人で百人を戦闘不能にしたり、彼を不意打ちした者の骨をあつさり折るなど、人間離れした能力を持つている上に残虐非道と聞いていた。今までの言動を見る限り、噂よりはまともそうだが……

「正体を知った途端警戒か。しかしさほど怯えていないあたり、なかなか精神面は強いようだな。それとも、大した噂を聞いていなかっただか?」

半ば呆れたように、しかしさほど気を悪くした様子もなく「アキラ」は答える。

だが下手に機嫌を損ねれば、何をされるかわからない。彼と対峙しているという衝撃に揺られながらも、綾花は慎重に言葉を紡ぐ。

「一応、あなたに関するうわさは聞いています。どうしてこんな部に? あなたは確か、すべての部に入部したのち退部したと……」

「ところが、すべてではなかったようだな。この部はまだ入部していない故、どんなものかと思ったのだ。まあそれ以外の理由として、駿也の見初めた相手がどんなものかを知りたかったのもあるのだが

……」

「は?」

更なる混沌が、訪れた。

三人が慌てて振り向くと、先ほどの綾花とは逆に真っ青で叫んでいた、「木下 カエデ」がいた。

「今何時！？ だいたいね〜とかはなしの方向で！ ホントに何時！？」

「今は四時四十分二十秒三てん……」

「そこまで正確じゃなくてもいいですよ先輩！！ どーしょ……急がないと閉まっちゃうー！！」

「だいたいが駄目というから正確に言ったのだが……」

微妙に落ち込んでいる日明を尻目に、カエデはさっさと荷物をまとめて走り出した。

「急にどうしたのですか、そんなに慌てて……」

「私、一人暮らしなの！ それで、今日中に銀行にいったお金をおろさないと、生活できなくて、その銀行は五時までしかやってなくて！！ というわけでとにかくサヨナラ！！」

よっぽど慌てているのだろう。支離滅裂になりながら、彼女はそれだけ言っただけで出て行ってしまった。

「待ってください！ 副部長と自己紹介は！？」

綾花も引きとめようとしたが、あっという間にカエデは小さくなって見えなくなった。

「自己紹介をしたいなら……カエデさんだっけ？ あの子に追いついて、その後に帰りながらすればいいんじゃないか？」

「で、でも副部長は……」

「私がやるう。一年間この部に拘束されるのは不服だが、他に入る部もない故、特に問題なからう」

駿也がさらりと提案し、日明がしっかりと綾花に答える。会話をしながらも、日明は部員用紙に記入を始め、駿也もそれに続く。

「不服といたしましたけど……副部長になったからには、しっかりやっってもらいますよ？」

からりとヘンが転がり、日明が駿也の紙を受け取った。

「問題ない。部長殿、貴殿の用紙を渡してもらえるか？ 私が職員室に出してくる。貴殿らは先にカエデのもとに行け。私は後から行く」

綾花は自身の紙と、あらかじめ預かっていたカエデの用紙を懐の内ポケットから取り出した。

「大丈夫ですよね？」

紙を彼に渡しながら、静かに綾花は問いかける。

なりゆきとはいえ「鬼神」と呼ばれた男を副部長にするのだ。抑えがたい不安と、拭いきれない恐怖が、その言葉を紡ぎだしたのかもしれない。

それを悟ったのか……男は、ほんの少しだけ抑揚を込めて言った。「恥になるようなことはしない。安心しろとは言わないが、道理を通そうとしている者に手は出さずと言っておこう」

そう言って日明は紙を受け取り、職員室へと向かう。

「おれたちも行くこう」

「ええ！」

綾花と駿也は、下駄箱へと駆ける。

こうして慌ただしく、放課後は過ぎていく

一章 完

一章 桜の散った学園にて（後書き）

どうも、作者です。

しかし、どうしたのですかね。実はあとがきを書くの初めてなんですよ。こんなあとがきでいいのかな？と思いつつ、でもやっぱりちやいます。

作者はあとがきのモラルっぽいものを生け贄に捧げ、作者の脳内世界とあとがきをつなぐ『ピンク色の四角いドア』を発動！

この効果により、作者の脳内世界から『岩上 綾花』をここに召喚！

ギイイイイイ……（扉の音）

綾花「作者さん、呼ばれていきなりなんですけど……このあとがき、大丈夫ですか？ ネット型の機械人形に拉致されたり、王様に心を碎かれても知りませんよ？」

作者「そしたらある意味貴女も道連れですね（笑）」

綾「笑いごとじゃありません！ ただでさえ、あなたはこの部に入部してから小説を掲載したのがこれが初めてなんですよ！？ もう入部して一年もたったのに……」

作「す、すいません……ネットやったり、ゲームやったり小説読んでたりで進まなくて……」

綾「つまりグダグダだったってことですね？」

作「ひえっ！？ 綾花ちゃん怖っ！」

綾「それはカエデさんのセリフです！ 男のあなたが言っても気持ち悪いだけですよ」

作「い、いやハンター稼業に手をだしたらハマってしまいました……ちなみに名前は「kraft」です、ガクホで見かけたらよろしくお願いします」

綾「社員ですかあなたは。もうあとがきも既にぐだぐだですね……」作「これくらいぐだぐだの方が会話っぽいですってきつと。しかし、

こうも私からかけ離れるとは思いませんでしたね」

綾「何が言いたいんですか。それだけじゃ伝わりませんよ？ 後半の文章みたいは、描写不足にならないでください」

作「慌てて書いたんだから仕方ないじゃないかー！ まあ、それはおいといて、先の発言ですが、メインとなったキャラたちには、『作者』の思想がかなり反映されています」

綾「それってどの小説でも同じことだと思えますけど？」

作「それもそうなんだろうですけどね」メインキャラのみなさんには、私が重要だと思っている精神の部分を組み込んでいます。もちろん、一人に一つか二つずつですけどね。全部だと作者になっちゃうんで。

あ、でもこの説明でいくと、綾花さんは少しイレギュラーになりますね。貴女には『過去の私』の思想を組み込んでるので、今の私にとっては、さほど重要ではない部分ですね」

綾「でも、覚えてはいるのですね。ということは、昔作者は私のようだったのですか？」

作「それが違うんですよ。創ったところは、似たようなものだったのですが、色々な状況下にぶち込んで経過観察してみたら、委員長タイプになってました。作者は軽い対人恐怖症持ちなので、内心では綾花のようなことをぼやきつつ、傍観していることが多かったですね」

綾「それが、『かけ離れた』ということなのですね」

作「ええ、なかなか新鮮な体験？ ができましたよ。自分の感覚を持っていたはずのキャラクターが、自分と別のキャラクターになっていくのですからね」

綾「気分良く話しているところ悪いんですけど、文字数見たらどうです？ 作者さん」

作「もうこんなに書いてやがる！ 本編もこれぐらいのペースで書ければいいのに……」

綾「本当にそうですね。次は早く書きあげてくださいよ？（じろり）

「作「は、はい……がんばります。それではみなさん、また次回にお会いしましょう！ 拙い作品を読んでくださり、ありがとうございました！ これからもよろしくお願ひします！」

作「まだだ！ まだ終わってない！！」

綾「！？ どうしたのですか急に」

作「フフフ……ここから先は追加シナリオというやつですよ」

綾「……ほとんどの人が初見でしょうに」

作「たぶんそうでしょうね」えっと、説明するんですね。私、大学の文芸サークルにて小説を書いていまして、そいつをちよつと修正して上げたのが本編ですね。あとがきはコピペです」

綾「いろいろ訳のわからない単語も出ていますからね。入部や、ガクホなんて単語、読者は首を傾げますよ？ 修正して出した方がいいのでは？」

作「俺は面倒が嫌いなんだ」

綾「……ひどい作者ですね。ほかにも罪状はありますか？」

作「……え？」

綾「しらばっくれなだけでください。早く書いてくださいって言ったのは確か五月のはずでしたよね？」

作「あ……えっと……」

綾「半年経ってやったことが一話を少し修正しただけをネットに掲載。で、二話の方はまだ半分も書いていない……と。何をしていたんですか」

作「……ネット、ゲーム、マ（ry）ですね」

綾（だめだこの作者……早くなんとかしないと……）

作「で、グダグダだったので、ネット掲載して評判を聞いてみよう

かなと思っただんですよ。読者の声の一つも聞こえないのは寂しいですからね」

綾「……言いたいことはそれだけですか？」

作「って、なぜ仁王立ちしているんですか……綾花さん？」

綾「なぜって……それはもちろんお仕置きですよ……あなたがさぼった半年間、鍛えていた甲斐がありました」

作「なお、ここに出てくる綾花はイメージであり本編とは一切関係がありません……」

綾「読者に親切をしてくまかそうという魂胆ですか？ そんなことをしても意味はないですよ……北斗……」

作「ちよっ！？ なんであなたがそれを使えるんですか！？ 明らかにイメージあわな…… ってこっちにくるなァー！ ヤメロー！

シニタクナーイ！！」

う わ ば ら ！

綾「お仕置きはしておきましたが、懲りずに遅くなる可能性もあります。そういう作者ですが、感想は待っているそうです。……ずうずうしい。では、いつになるかわかりませんが、次回までお別れです。ありがとっございました」

二章 1 紳士参上！（前書き）

大変遅くなり、申し訳ありません。今回、本作品を掲載するにあたり、重要な問題が起こったため掲載を中止していました。そのため、久々な上に文章が短いです。詳しくはあとがきで説明いたします。

さて、堅苦しいのはここまで！
本編どうぞ！

二章 1 紳士参上!

はじめのころ、この世界に境界はなかった
その世界の中で、私は、私でなくなった私の行動を
見つめている。

のんきに話をしているみたいだけど、もう銀行閉まる
まで時間ないわよ?

忘れているみたいね……仕方ないわ、少しだけ干渉
しましょう。

流石に時計と通帳を持たせれば、気がつくわよね?

少しばかり赤みのかかった太陽が、その坂を照らしていた。もう
少し時期が早ければ、両脇に植えられた桜の花が映えていただろう
が、今は葉ばかり茂っている。

その坂を慌てて駆けていく制服姿の女子がいた。元々乱雑だった
茶髪をさらに振り乱して、彼女は坂を駆けていく。しかし……
「ひゃあああああああつ!?!」

唐突に彼女はすっ転び、学生鞆の中身を豪快にばらまきながらゴ
ロゴロと転がっていく。痛みをこらえながら彼女が立ちあがると、
そこにはもの見事に散乱した教科書とノートの群れがあった。

「あわわわわ……時間がないのに」

散乱した教科書を見てざっと青ざめるカエデ。すぐに拾い始める
が……あわてているせいか時折こぼしてしまう。そこに、通りかか
っていた生徒の一人が素早く駆け寄り彼女の手伝いを始めた。

「大丈夫か? 手伝うZE!」

「ほえ? 誰かわからないけどありがとう」

思わぬ助け舟に驚きながらも、感謝の言葉をカエデは忘れない。

「だれとも仲良くしなさいと、そのために笑顔とお礼の言葉と、そして出来る範囲で困っている人を助けなさい」と誰かに言われたような気がするのだ。きつと両親の言葉だろう。カエデはそう思っている。

「俺は石川 宗司いしかわ そうじってんだ、よろしくカエデちゃん」

「何で名前知ってるの!? ハッ!? まさか超能力者!?!」

目を輝かせながらカエデは聞いたが、彼はどこか遠くを見つめながらつぶやく

「ハハハ……超能力かゝあつたらいいよなあ」

「え? 違うの? じゃあなんで?」

「カエデちゃんはちょっとした有名人だぜ? 二年や、三年の上級生もかわいいよな。って評判だ。狼には気をつけるよ?」

「そうですね、あなたみたいなのには特に」

「そうそうオレみたいなの……って何言わせてんねん!」

何故か大阪弁でボケツツコミをやらかした宗司。しかし、言ったあとでふと思う。今の発言はカエデのものではない。では誰のものだ? カエデの女友達だろうか?

「……」

謎の女性はどうやらノリが悪いらしい。何の返答もないせいで、俗に言う「滑った」時の空気が漂ってしまっていた。内心やらかした! と思いつつも、こういう状況下ではいかんせん話しだしづらい。

「あれ? 綾花ちゃん!? どうしてここに!?!」

そんな空気を気にもとめず……というより、その空気を全く読めないカエデは、綾花がここに来ていることに驚いていた。

「自己紹介がまだでしたので、帰りながらしようということになったのです。それで追いかけてみたらこのありさまですよ。で、あなたは誰ですか?」

キツイ口調で、半眼で宗司を睨みつけながら女性は言い放つ。…

…ここはガツンと決めてやろう。彼は胸の内でつぶやき、親指で自身を指さしながら胸を張り

「通りすがりの紳士だ」

びしり！ と宗司はいつてのける。が、先ほどより彼に向けられる視線は鋭い……というより、不審者を見る目つきへと変わっている、

「……警察を呼んだ方がよさそうですね」

完全に逆効果となっていた。

「いやいやいや！　なんでそうなるよ！？」

「自身を紳士と名乗る方に碌な人間はいません。それは、『自分は正直ものです』と言っているようなものですよ？」

反論ができない。完璧な理論武装である。彼女の話し方をみて、失敗したと宗司は思った。こういう生真面目なタイプはきっちりし過ぎていて、ほどよい冗談を交えながらの会話が通じない。議会や会議の進行役になると、話題をまとめながら進めてくれるのでありがたいが、文化祭などの司会にするとクラスが萎えるだろう。そして、こういう人間は話がこじれると非常に面倒で、誤解を解くには細かい説明がいる。

「助けてくれたことは確かよ」

「おお！　カエデちゃんマジ天使！」

そのための言葉を思い浮かべている時に、助けた彼女がぼそりと言ってくれた。思わず本音がこぼれる。これで弁解しなくてもよくなったと、彼は安堵した。

「えへへ〜それほどでも……ってあれ？　私何か言っただけ？」

ところが、カエデは何故か混乱していた。首をかしげながらきよるきよるしている。

「健忘症か？　あるいは若年性アルツハイマーかもな」

また別のだれかが発言する。彼女を追いかけてきた部員だろうが、ずいぶんなもの言いだと思った宗司は、今度こそ、ガツンと決めるべきだろうと

「おいおいそんなこと滅多に……っ!?」

『滅多にないだろうし冗談でも、んなこというんじゃない』そう言おうとして……発言した人物を見て絶句した。

彼は、同じクラスの学友であり、

有名人であり、

異端であり、

様々な意味でこの学校の頂点に君臨する男

二年三組 出席番号19番 酒月 日明がそこにいた。

二章 1 紳士参上！（後書き）

作「ちよりーす！ 作者でーす」

カエデ「ちよりーす …… じゃないよ作者さん！ すっごく遅いよ！！ 綾花ちゃんにお仕置きされたのに懲りてないね！！」

作「今回は結構真剣に問題が起こったんです」

カ「ほえ？ どんな？」

作「この小説のキーワード見てもらえば想像できるかもしれないけど、この小説はそのうち能力者同士のバトルをやる予定があったのですが… 使う予定の能力がほかの小説とかぶってしまってます…」

…」
カ「ざ・わーるど！ とか？」

作「時間制御系の能力なら、昔からある強力な能力の一つですし、使用者も何人が存在しているのでさほど問題にはならないのですが… やっかいなことに、『とある…の…』という今人気絶頂のシリーズのだったんです」

カ「でも、自分で考えた能力だったんでしょ？ なら使っちゃえば…」

作「友人にこのアイデアをいったら、『これパクリじゃん』って言われて、それでそのシリーズを読んでみたら… 能力の応用や考察、弱点の研究まで突き詰められていたんです。タイミングはともかく、出来が元ネタ以下ではどうしようもありません」

カ「む、むう」

作「作者にも衝撃でしたよ？ おれのかんがえたさいきょうのうりよく！ がすでに類似したものがあって、それがどうあがいても作者の表現力や考察力の及ばない領域に達していたのですから。おかげでこの小説がぶち殺されましたよorz ほかに、テストがあつたり、モンハン買つたり、バイトやつたり、ディシディア デイオディシムやつたりで大変だったんです」

カ「うち二つ関係ないのが混ざっているような……」

作「いえ、小説書くのに関係ないのは一つだけです。ディシディアは大事でした」

カ「え？ だつてゲームでしょ？」

作「そうなんですけどね。……通信回線使つてで読者さんと対戦したんですよ。この名前で登録していたので、相手の人が、『書いてる人？』つて聞いてきてくれたんです」

カ「そーなのかー」

作「……こんな小説でも見てくれる人がいるつてわかったら、元氣が出ましてね！ 無計画上等でも、書いていこうかと思つたんですよ。対戦してくれた方。ありがとうございました！ また遅くなるかもしれないですが、楽しんでいただければ幸いです」

カ「イイハナシダナー」

カ「このメモ……どうしよう？ この空気で作者さんに見せるわけにはいかないよね？ 読者さんにはこっそり見せるね」

綾花からのメモ

……下手したら本編より多いあとがきを見てくださっているみなさん。投稿が遅れてしまい申し訳ありません。今回もお仕置きをしようかと考えているのですが、どうでしょう？ 以下の選択肢から選んでください。なお、本編とは関係ないアンケートですので、気楽にどうぞ

1、お仕置きなし

- 2、お説教
- 3、次回まで竿巻きにして木にぶら下げる
- 4、ウイルスでジワジワ……
- 5、斬刑に処す

回想：1 日明の功績（前書き）

早めに投稿しようとした結果がこれだよ!!
Orz
短いし内容薄くてごめんね!!

回想 - 1 日明の功績

石原 宗司が、日明という存在がどういうものかを認識したのは、去年の夏のことだった。

この時点で、もう「酒月 日明」は有名になっていたが、彼を気に入らないものも多く、敵視する勢力も多かった。否 彼を排他しようという人間がほとんどだっただろう。

教師たちは、彼のことをよく思っていなかった。眠ったように机にたたずんでいるかと思いい、問題を解かしてみると必ず当ててくる。無駄口を叩かないのはありがたいものの、面白くはない。クラスメイトからすれば、何もしていないのに問題が解け、おまけに何かを話すことは少なく、いつも一人なので、気味が悪いし、何より妬ましく見えていた。

そのためクラスでも孤立し、彼は一人でいることが多くなっていった。だが、直接的に彼をどうかしようとするものはいなかった。ふくる叩きにしようと思えば逆にそのグループが壊滅し、いやみを言っても、至って普通の反応で返されてしまうからである。それでいて何より不気味なのは……日明の態度は、普段と何ら変わりがないことなのだ。

そう……彼は周りから疎まれようが、いやがらせを受けようが、その態度を一度たりとも変えることがない。誰かと話すとしても必要最低限のことしか喋らず、視線はどこか虚ろなようで、それでいてしっかりと見つめてくる。約一名の例外がいたが、その人物を除いて、皆が酒月 日明を異端扱いし、畏れ、遠ざけていた。

そんなある日……夏休みの直前に、一つの事件が起こる。それは、シンプルに言えば酒月 日明をシメようと言うものだったのだが……規模が今までの比ではなかった。

対立していた不良組織、他校で縄張り争いをしてきたメンバー、

日明にメンツを潰された成績優等性……本来ならいがみあい蔑み合う関係の面々が、彼を倒すために手を取り合い集結したのである。その数、およそ百三十名……そのメンバーの中に 石川 宗司もいた。が、彼は日明を倒すための実動部隊ではなく、日明を倒すための場所の確保と、戦闘が始まったときに警察などの邪魔が入らないよう、見張りをする役目だった。

他の裏方役とも相談し、日明との決戦の舞台は廃工場内に決まった。そこそこ広く、戦闘を行う部隊約110名が隠れることができ、さらには建物付近には青いコンテナが大量に放棄されっぱなしになっているおかげで人目にもつきにくい。場合によっては、この物陰から奇襲することもできると、最高の立地である。戦闘区域が決まると作戦会議まで行われた。優等生組の中にいた戦術、戦略マニア、さらには不良組の戦闘スキルや経験を考慮した、本格的な作戦が練られた。

そして作戦決行から一時間後、宗司が見たものは
無数に倒れた仲間たちと、その中心で独りたたずむ「普段通り」
の酒月 日明の姿だった。

回想・1 日明の功績（後書き）

作者「今回は頑張って早めに更新したぞー！」

宗司「でも短けえ……しかもセリフ一つもないってどういうことだよー！」

作「いや〜ここらあたりで、日明君がどういうやつか書いておかないとまずいと思ひまして……作者の脳内では無双状態だったし、設定当初から今までの間で、一番イメージの変化がなかったんですよ。でも、それが今回はそれがあだになりました。危ない危ない」

宗「キャラが定まっていいことじゃねえの？」

作「基本的にはそうですね。ただ、具体的にどういうやつか書いていかないと、読者さんがおいてけぼりになっちゃうんですよ」

宗「つまり、なんだ？ 作者と読者との間で、キャラの認識にズレが出ちまうってことでOK？」

作「その通り、正解した宗司君にジューズをおごってやるう」

宗「一番いいドクターペツパーを頼む」

作「ずいぶんマニアックなものを……」

宗「そういうあんたはネタを融合させるな！ それはともかく、例のアンケートが溜まってないが、二章終盤で集計するらしいぞ。ゆつくり選んでいってねー！」

作「？ おまえは何を言ってるんだ？」

宗（あゝそつか。作者は見えていないんだっけ？ かわいそうな遊…

…じゃなくて、かわいそうな作者……）

作「無視か！？ 無視なのか！？」

二章 2 お守りと大仏さま（前書き）

なんとか、一か月更新なしは阻止できた……
こんな作者だが、大丈夫か？（オイ

二章 2 お守りと大仏さま

身体がどつと、嫌な汗をかいた。心音がはつきりと聞こえ始める。何をしたのでもなく、何をされた訳でもない。それでも……『彼』はそこにいるだけで周囲の人間を委縮される。それだけの伝説と功績と逸話を、彼は持っているのだ。

「日明先輩、もう追いついたのですか……さすがですね」

メガネレディーの発言も水の中で聞いた音のように、ぼんやりとしていてひどく遠くに感じる。思考がまとまらないせいで、発言の意味もほとんどわからない。

「どうしたのですか？ 急に黙り込んで」

となりから話しかけられ、「ヒヤア!？」などと悲鳴をあげながらも、

「ただだ黙り込んでねえし！ ちょっと『鬼神』に遭遇してビビっただけだし！」

辛うじて、返事をする事ができた。

だが同時に、彼は墓穴を掘ってしまったている。

「日明先輩……彼になにかしたのですか？」

キリリとメガネを吊り上げて、彼女は問い詰める。そして宗司は、自身の失敗に気がついた。基本的に日明は、学校で暴れたりすることはない。虚ろな瞳で何かを眺めているか、誰かの頼まれごとぐらいいしかないのである。そう、彼が暴力を振るうのは

「何かしたとするならば、その前に私が何かされかけたのだろうな。私は自身から仕掛けることはまずない。何らかの戦闘技能に優れているような者なら、真剣勝負をすることはあるが……この者はそうではないな」

淡々と日明は告げ、彼女は渋い顔をした。

そう、彼は自身に危害を加えようとしたものには何の容赦もしないが、そうでなければ特に何もしないのだ。これで宗司が『鬼神』

にちよつかいをかけたであろうことが、彼女に伝わったことになる。
(まいったな〜こりゃ)

非常に雰囲気が悪いが、どうしようもないように思える。かつて手を出したのは間違いなく宗司で、それを叩きのめしたのが日明なのだ。いかに彼が人外じみても、道理は彼の味方である以上、マジメメガネは助け舟を出してくれないだろう。

そんな淀んだ空気を、吹き飛ばすかのよう

「今は昔のことなんて関係ないよ〜ここにいるのは、私を助けてくれた……えっと、紳士だよ！」

ふんわりと、自分が助けた彼女が言った。

「紳士？ スーツもシルクハットも、蝶ネクタイもヒゲもないのか？」

「さすがにそれは……古すぎませんか？」

そつと、辺りを包んでいたいやなモノが霧散してく気がした。

「名前覚えてくれよ、カエデちゃん！ オレの名前は石原 宗司！
次は忘れないでくれよ！ 接客業でこれやったら大チョンボだぜ
!?!」

その流れに乗るように、わざと機嫌悪そうに宗司はいう。内心は彼女に感謝しながら……

「い・し・は・ら・そ・う・じ君！ うん！ 覚えた!! ごめん
ね〜私よく記憶が飛んじやうんだ〜って、あれ？」

「? どうしたん？」

不意に上着の内側をまさぐり、きよるきよるとあたりを見回すカエデ。そして……あつという間に顔が青くなつていく。

「ない……? お守りがない……!?!」

「お守り? 特に珍しいものでもない……」

「あれがないと……だめ! 探して!」

日明の問いかけを遮って、カエデは叫ぶ。急に取り乱した彼女に、三人は混乱した。宗司は知るよしもないが、その慌て方は銀行に行こうと飛び出した時以上の慌てぶりである。

宗司はわけもわからず思わず後ずさり……

カラン……

と、乾いた音が響いた。

「……………」

足元に視線を向けると、長細い木の棒のようなものが転がっていた。どうやらこれにぶついたらしい。手にとってみると

重い。と感じた。

それは、見た目に対する重量　物理的な意味での、ただの木の棒としての重量でもそうなのだが　何か、不吉な重圧なようなモノも感じる。これではお守りというより、呪いのアイテムと言われた方がしっくりきそうだ。

「もしかして……………これか？」

たぶん違っただろうと思っただけで差し出したが、カエデはソレを見た瞬間、宗司の手の中にあつたモノを奪うようにかっさらい、まじまじと見つめる。次にくるりと回し、手でその感触を味わい、一つこくりとくなく……………

「良かった　ありがとねっ」

宗司にっこりと、太陽の光を受けたひまわりのような笑顔を見た。

(ぐはあ！　こいつは……………強力すぎる……………！)

まぶしい。あまりにもまぶしい笑顔に思わず顔を手で覆いたくなる。穢れを知らない無垢な微笑みに、宗司はたじろぎ、心をわしづかみにされた。

「……………お守りとしては無骨なものだな」

「日明先輩……………KYという言葉を知っていますか？」

「む……………」

無粋な「鬼神」のツツコミに、メガネレディーの辛辣な一言が刺さる。おかげで、甘い青春気分が台無しにされてしまった。

しかし、こうして会話を聞いていると、「鬼神」の感性は相当ズレている。一般的な人間の発想ではない。と、思っていると、ある

言葉が宗司の頭をよぎった。

最近よく聞く言葉に、「天才と変人は紙一重だ」という言葉がある。

紛れもなく、「鬼神」は天才の領域にいる訳で　つまり、変人に近いということであり　そんな人物が『マトモな感性を持ち合わせている』と考えること自体がおかしいのかもしれない。あの事件のせいで彼の印象を宗司は決めてしまっていたが、少しばかりイメージを修正する必要があるだろう。最も、どうイメージを修正しても、彼が化物であることには変わりがないだろうが。

などと、ぼんやり考えると「おーい！　何してるー！？」と、駆け寄りながら男子生徒が寄ってきた。そいつは……

「大仏^{だいぶつ}サマじゃねーか。なんで？」

近づいてくる彼は、学校でも「鬼神」とは別の意味で有名な人間である。特に警戒する必要のない相手だが、少なくとも宗司との接点はない。

「大仏様……？　有名なのですか？」

ぼそりとつぶやいたその言葉を、委員長っぽいのが聞いていたらしい。隠すようなことでもないので、宗司はそれに答えた。

「ああ、まあそれなりにな。なんでも、困っている人間を見捨てられないらしいぜ。特に『孤立』した奴は放っておけないそうさ。それでいて性格も良いのと……あいつ、『オサラギ シュンヤ』って名前なんだが、オサラギは漢字で書くと『大仏』ってなるもんだから、そのまま『大仏サマ』ってあだ名になってる」

実例としては、日明が一人孤立していた時、敵意を向けなかったことだ。今も時折一緒にいる姿を見かけることから、仲はそれなりに良いのだろう。

「駿也か。遅い。綾花と共にいたのではないのか？」

「……教室にカバン忘れてた。鍵かけなおしたりしたら時間食ったんだよ。ところで、なんでこんなところで話してるのさ。時間大丈夫？　銀行しまるんじゃ？」

「「「あ」「」」

三人は同時に、間抜けな声を上げた。そして……

「あばばつばばばばああああつ！……」

カエデ奇声を発し、顔色を白黒させる。よほど重要な用事か何かなのだろうか？

「そそそそそ宗司君！！ ごめんね！ これから私、お金下ろさなきゃいけないからー！ 今日はほんとにありがとね！ またね！！」
「ちよつ！ 待てやあ！！」

唐突にカエデは走り去ろうとし、宗司は反射的に彼女を追いかけた。

正直、今の会話の内容はよく理解できない。「鬼神」「メガネ委員長」「大仏サマ」「カエデ」の四人に何らかの接点はありそうというくらいだ。

状況も特に読んでいるわけでもない。ただ本当に、「巻き込まれた」だけ。

それでも

この奇妙な偶然を、宗司はそれだけで終わらせたくなかった。

二章 2 お守りと大仏さま（後書き）

作者「あ、危なかった……一か月更新してませんつくまであと二日
しかなかった……」

日明「……ある意味アウトだろう？ 五月中旬の感想の返信が終わ
った後、これだけ時間をかけてもこの量と質だ」

作「うぐぐ……なんだろう、もうあとがきが作者の言い訳と贖罪コ
ーナーのような気がしてきました」

日「なら、そうならなくても良いようなモノを書けるようになるの
だな。少なくとも、我々にダメ出しされているうちは論外だ」

作「うひい……こんな所で『鬼』にならないでください」

日「読者の方々も、この者を甘やかさないようにしてもらえると助
かる。もちろん、感想等でほめて頂けるのはありがたいのだが、そ
れだけではこいつは怠けかねん……しかし、大筋は決めてあるので、
そこは安心してほしい」

作「まあ、そうなんですよね。本当はもっと早く二章を進める予定
でしたが、キャラクターの皆さんを、作者の中で自然に動かさない
とどうにも調子が狂ってしまうのですよね」

日「読者の皆に分かるように説明すると、作者は台本を書いて我々
に渡している。それを我々が演じるのだが、その時々でアドリブが
発生することが多々あるわけだ。そして、そのアドリブを小説とい
う形で、作者がまとめると言ったところか」

作「ただ、かなりの高確率で台本がブチ壊しになるんですよね。し
かも容量が割増しになっているという……キャラが安定しているお
かげで重要な部分がブレにくく、伏線を張りやすいのはありがたい
のですが」

日「まとめられないのは文章力、及びコミュニケーション能力不足
が原因だろうな。よくそんなステータスで小説を書こうと思ったな」
作「妄想すること自体は得意分野なんですよ！ だから小説も書け

るだろうと思っただのですが……ごらんのありさまだよ！ チキシヨ
ーメー！！ これから小説を書こうとしているみなさんへ！ 軽い
気持ちで小説書こうと思うなよ！？ 絶対に思うなよ！？」
日「……ネタが古くないか」
作「お・前・が・言・う・な！」

二章―3 襲来（前書き）

駿也「また一カ月か！」

作者「……すみません」

駿「あれ？ 言い訳しないの？」

作「これだけやってるとね……もう反論する元気もありませんよ」

駿「……？ 普段と様子違うけどどうした？」

作「何、今月の始まりに、祖母が亡くなっただけです。そのあとの疲れがまだ抜けきってないだけです。もうすぐ一カ月立つつてのにね」

駿（それで元気ないのか……まあそれなら仕方がな……）

作「某弾幕シューティングにハマってたのもありますがね！」

駿「その一言で台なしだよ！！」

二章―3 襲来

「つ、ついたー！ 時間は！？ 十分前！！ 間に合ったよ」

駅からやや離れた、とある銀行の前で木下カエデは息を荒くしながら言った。少しだけ息を整えてから入ろうか。そう思い、建物の前で休んでいると……一人の学生が話しかけてきた。

「女性にしては早いな、カエデ」

彼女が振り向くと、男子生徒が立っていた。息一つ切らさずに話す彼は、カエデの全力疾走を追いかけた後とは思えない。

「そういう日明先パイも早いよ！ 何で息切らしてないの！？」

「日々修練の賜物だ。カエデもやるか？」

「ん〜いいや。今のままで」

やんわりと先輩の申し出を彼女は断った。別に彼のように超人になりたいわけではない。などと思っていると、遠くから三つの人影が迫って来ていた。徐々にこちらに寄ってくるそれは、彼らが見知っている制服を纏っている。

「やつと……追いついた！」

「二人とも早過ぎ！ 日明は当然として、カエデさんも早いよ！？」

三人は近づくや否や、内二人は各々の言葉を口にする。唯一の女性である三人目に関しては、息も絶え絶えで口もきけない状態だった。

「そお〜えへへ〜」

「褒めて……ませ……ん……よ」

照れるカエデに、息を荒くしながらツツコミを入れる綾花。今にも崩れそうな彼女に、駿也は肩を貸していた。そのまま五人は、銀行内へと入っていく。

「じゃあ行ってくるね〜ちよつと待っててね〜」

ようやく目的地へと到着したカエデは、ATMに向かっていく。残された四人も、これで一息つくことができるだろう。

「なんか……間に合ってよかったですね……」

「そうだね。そっつかしかつたけど、なんかよかった」
「全くだ」

オカルト研究部の三人は、やや愚痴気味にこぼしつつ、カエデが時間に間に合ったことを良く思っていた。が、

「えっと、話しているところ悪いんだが……どういう状況なんだ？」
部に参加していない宗司は、なにがなにやらさっぱりだった。

「仕方ないですね……説明しましょう」

そして宗司は、ようやく彼女が急いでいたのと、この四人が一緒に行動していた理由を知ることになる。

「へえ……オカルト研究部ねえ……今度学校来る時俺も入部しているか？ やることなくてヒマしてたんだよ」

「……カエデさんが目的じゃないでしょうね？」

「H A H A H A！ そんな訳……すいませんちよつと下心ありますごめんなさい」

さらりと流そうとして……綾花にジト目で睨まれてしまい、すぐに頭を下げる羽目になった。

「終わったよーみんなごめんね！ 付き合わせちゃって」

「気にしないでください。それでは帰りま……」

「おっと、その君たち。すまないが少々出て行くのを待ってもらえるかね？」

「え？」

カエデがお金を下ろし終わり、綾花が帰ろうとしたところ……誰かが五人に声をかけた。他人行儀でありながら、不快感を感じさせない丁寧な口調で話しかけられ、そつと振り向くと……そこには、金髪の男性が黒い塊を……『拳銃』を構えて立っていた。

二章 3 襲来（後書き）

ピチユーン！！

作者「あ、またやられた……」

駿也「頼む、あとがきぐらいしつかり進行してくれ……」

作「おっと、失礼しました。いや、昔のシューティングゲームばかりやっていましたもので、弹幕シューティングをやったことがなかったのですが、これはなかなか新鮮ですねえ……」

駿「そんな年じゃないでしょうがあんたは。てか、作者の年だともう弹幕シューぐらいしかなかったんじゃない？」

作「そうですねえ……ゲーセンにはその手のしなくなりましたね。中古シヨップで古いの買ってよく遊んでいます。意外とイケるもんですよ。最近のはグラフィックばかり凝ってて中身がスカスカのとかありますから」

駿「前から思ってたんだが……あんた、重度のゲーム好きだよな？」

作「あはは……でもRPGが大の苦手という、かなりの偏食家ですがね。あ、そうそう、ここでちょっとしたお知らせがあります」

駿「まさか打ち切り？」

作「いやいや、こちらはこちらで進めますが……先ほど話題になった作品の二次創作を始めました」

駿「は！？ こっち進められてないのに何やってるし！？ てか、まだ一作品しかプレイしてないだろーに！」

作「知っている方は暇つぶしにつまんでくださいな。これは予想ですが、多分二次創作のほうペース速くなると思います」

駿「オイイ！？」

作「いや、だって二次はもうほとんどキャラができているんだもの。たとえるなら二次創作は設定というパーツを組み立てるプラモデルで、独自設定やオリジナルキャラクターで塗装してオリジナルテイ

を出す。自身で創作して作る小説は、まずそのパーツや塗装から細かく設計して組み立てなきゃいけないくて、ズレが出たら最悪一から組み立てなおさなきゃいけないって感じですか。」

駿「わかるような、わからないようなたとえだな……。」

作「だから、二次創作のほうが圧倒的に難易度が下がるんですよ。」

そもそも、その作品を知っている人に向けて書くわけですから、さらに難易度は下がります。二次書ける人でも、一からオリジナルは無理！！　って方も結構いるのではないのでしょうか？」

駿「でも、ちゃんとこっちも更新してくれよ？」

作「善処させていただきます！（キリッ）」

駿（し、信用ならねえ……）

二章 4 お守りの正体（前書き）

作者以外全員「ま・た・遅・い・更・新・か・！」

作者「それが作者クオリティ……ってのわーっ!？」

日明「二次創作は一時、一日一回更新していたではないか！ どうしてその集中力をこちらに使わん!？」

作「な、何を言ってるんだ日明君！ 二次とオリジナルの難易度は天と地の差が存在しているのだよ！！ それにあっちのが、読者さん多いし……モチベーションが保ち易かったといえますか……」

綾花「以前の半年後投稿より大分マシですが……やる気あるのですか？」

作「微妙。最近かなり鬱い」

宗司「うおい！！ しっかりしてくれよ!？ この小説書けるのお前だけなんだからな!？」

作「いや〜キャラは出来てるのですがね……いや〜かなり鬱いわ〜」
カエデ「ん？ 何これ……」 剣 魔法 学園モノ2「？」

作「げっ！ タンマタンマ！！ それはらめえー!!」
駿也「……ほんとに好きだよね、ゲーム」

作「ハハハ……アーケードゲームもよくやりますな。B B A Bで『テツテレ王子』って名前で、L O V : R E : 2だと最近カード無くしたんで、『リユーチ』という名前で再開しようk」

全員「小説書けよ!？」

作「でも、鬱気味なのは本当だよ！ よ!？」
全員「説得力皆無!!」

二章―4 お守りの正体

「君たちは実に運が悪い。もう少し早く出ていけば我々に遭遇しなかっただろうし、来るのが遅ければ、そもそもここに入ってこれなかったのだろうからね」

飄々と語るは、駿也たちに話しかけてきた金髪の男だ。何人かのグループでの犯行だったらしく、覆面をした二人組が、窓口の係員に拳銃を突きつけていた。他にも覆面をした者が二人おり、この金髪男はリーダー各らしく、他のメンバーに指示を出していた。

「このご時世に銀行強盗か。リスクとリターンがつり合っていないぞ?」

「ご心配どうも。それは、携帯電話で通報できるから……かな? 甘いね。電波の状態を見てみたまえ」

「……!??」

宗司が確認すると……そこには「圏外」の二文字が表示されている。綾花たちや他の巻き込まれた客も含めて、全員の電話が通じない状態らしい。

「どうして……!??」

「なに、オレオレ詐欺というのが流行っていたらどう? それの対策で、銀行では電波が通じない状態になっているのさ。係員が制御しているだろうけど……通じさせる気はないよ。残念だったね」

人をからかう様に言っているのける金髪強盗。日明は一つ舌打ちし、その場に座り込む。さすがの彼にも打つ手がないらしい。

「え? うそあ!?? 強盗!? 強盗なの!??」

一人混乱し、大声で騒ぎたてるカエデ。その様子を好ましく思わなかった犯人の一人が怒鳴り散らした。

「うるせえ! 騒がしくしてつと、無理矢理黙らせるぞ!」

「あわわわわ……!」

ところが、全くの逆効果になってしまっているようだ。脅された力

エデは、ますます慌てふためいている。

「黙れ」

「ホウっ!？」

全く別の覆面をした男が、カエデの背後に回り込み殴って気絶させた。

彼女が黙りこんだのを見て、唯一覆面をしていない金髪の男が、銃を掲げて宣言した。

「……我々もできれば穏便に済ませたい。手間取らせなければすぐ終わるから、少々待っていてくれたまえ。そうそう」

掲げていた銃の引き金を引く。火薬の破裂音と共に、天井の壁が欠けた。少し間をおいてからキン、と。空薬莖の音が響く。

「この銃は本物だ。今は使わなかったからと言って、変な気を起こさないように」

静かに目を細めて、店内の人間に忠告する。……中にいる人々は、抵抗する気も失せたようで、俯いたまま黙り込んでしまった。

銃声が聞こえていたのだろうか。外にいたカラスが、鳴きながら飛ばたいてく。ひどく不吉な予兆に、思わず宗司は日明に耳打ちした。

(……『鬼神』、どうにかできねえか?)

無数の生徒相手に、無傷で帰ってきた逸話を持つ彼なら、なんとかなるのではという期待を込めて聞いたのだが……

(……無理だな。この場にいるのが私と、誰か一人ぐらいなら問題ないが……人質全員を守りきる自信は無い。犯人五人を黙らせる間に、犠牲が出る可能性がある。……もう二人ぐらい手慣れがいるなら、仕掛けても良いのだが)

返ってきた答えは、あまり良いものではなかった。……それでも、『一人なら倒せる』と言っている辺りは流石といったところか。(大丈夫。手は打ったから。しばらくすれば警察が来るはずだから、ちよっと待ってて)

二人でコソコソと話していた所に、視線は向けずに駿也が呟い

た。連絡を入れたらしいが、一体どうやったのだろうか？

と、宗司が考えていたときに……

「ようやく眠れると思っただら……これはどういう状況なのかしら？」
気絶していたはずのカエデがむくりと立ち上がり、本当に不機嫌そうにつぶやいた。

「あ？ てめえ……今の立場わかっていつているのか？」

先程もカエデを脅していた強盗が、彼女に突っかかる。どうも、この犯人にカエデは嫌われたらしい。

「ごめんなさい。解ってないわ。だって少し前から眠ってたんですもの。ああ、でもあなたに理解できるわけないわ」

「馬鹿にしてんのか！ 眉間にブチこむぞ！！」

激昂し、銃を楓かえてにむける犯人。それを見て彼女はきよんとし

「それは……銃？ 本物……？ ぶっ、くくく……アハハハハッ
ハハ！！」

嗤った、ひどく愉快そうに。聞いている身としては、ひどく不快で不吉で不穏な笑い声を上げて。……先ほどのカエデの反応とまるで違う。

「何がおかしい！？」と、犯人は銃口を押し出すように楓に向けるも……その言葉はひどく虚しく響いた。それを無視して、楓は続ける。

「とっても愉快だわ！ カバンをぶちまけた時はどうなる事かと思っただけ。こんなイベントが待っていたのなら運がいいわね！！
ああ、違うわね。今日という日がひどく幸運なんだわ……面白そうな部があったから誘導して、その結果でこうなっているんだから……
綾花さんだったかしら？ あなたには感謝しますわ。この因果を作ってくれて」

そう言うと、綾花に向かって微笑みかける。その笑みは、先ほどまでのカエデと印象が違いすぎた。幼い感じの笑みだったのが、顔つきは同じはずなのに、今は大人びた……妖艶な雰囲気醸し出して、それを見た綾花は困惑している。

「死にてえのかてめえ！」

「それは困るわ。……ああ、そうだ。今のだとどうして私が愉快だと言った説明、してないわね。ま、気が付かれると私が困るのだけだ。」

とても銃口を突き付けられた人間の行動とは思えない。楓は命が惜しくないのだろうかとも思ったが、今の発言を考えるとそういう訳でもなさそうである。

「ねえ、あなた……誰かを殺せる状況ということは」
不意に、楓が制服の内側に手を突っ込んだ。同時に、犯人へと距離を詰める。

淀みのない動作で迫り、誰も彼女の動きに反応できない。そのまま胸に飛び込むような形で強盗にぶつかり

.....サクッ.....

湿った音が、一つ響いて

「誰かに殺されても、文句は言えないのよ？ 今度からは殺意を向けたら、とっとと相手を殺すように心がけなさい？」

「あ……え……？」

訳も分からない様子で、小さく声が漏らす。腹部辺りには、赤黒い染みが広がっていつて、その中心には……彼女が「お守り」と呼んでいた物が付きたてられていた。

よく見ると、それはお守りなどではなく 鈍く光る、冷たい金属。鋭いナイフが、彼女の手には握られていた。

二章 4 お守りの正体（後書き）

駿也「半端なところで切ったね」

作者「その方が、読者さんの妄想を掻き立てることがデキルノデス」
駿「でも、更新早くしてよ！ カエデさんがどうなったか気になるし」

作「伏線はちゃんと張ってるし、よくあることだから分かってる人も多いでしょうな。ただ……そこまで単純な物じゃないとは言っておきましようかね」

駿「気になるなあ……それともう一つあったんだけど、僕の口調変わってるよね？ ミス？」

作「伏線です。諸事情により、ちよつと強引な修正でもありました
が……なら伏線にしまえば良いと思って」

駿「それ言つていいの？」

作「……多分、回収は早めにするつもりですし」

駿「ネタが割れる前に、更新してよ!？」

作「……あえてノーコメントで」

駿「ちよつ!？ それはどういうこと」

作「ではまた次回」

駿「に、逃げるなーっ!！」

二章―5 響く銃声（前書き）

作者以外全員「……………」

作者「アハハ……………もう一年経ちましたね？ 早いもんです」

綾花「……………締まらない遺言ですね？」

作「え！？ ちょ！？ 作品が終わるっ！！！」

駿也「今度亀更新速度って、タグに入れとくね」

作「ふ、不幸ダアーツ！！！」

日明「……………因果応報だろっな」

二章―5 響く銃声

「なっ……………！」

強盗たちが、人質が、駿也や綾花が硬直する。先ほどまで無邪気にふるまっていたが彼女が、なんの躊躇もなく人を刺そうなど、誰が予想できただろうか。楓はゆっくりと崩れ落ちていく犯人から銃を奪い、そして、すうと犯人たちに銃を向け……

「少し無防備過ぎね。それとも、この武器は飾りかしら？」

つぶやいて、片手で握ったソレの引き金を引いた。

火薬の破裂する音と、コンクリートが削れる音はほぼ同時に聞こえる。やはり彼女には、なんのためらいもない。

「こ、この女っ！」

我に返った強盗たちは慌てて彼女に銃を向けるが……刹那、彼女の後ろにいた覆面の男が、大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

動いたのは、酒月 日明。楓に注意が逸れている間に、側面に移動していたらしい。

「……………そっちは頼つていいかしら？」

「任せろ。ただ、出来れば死人は出すな」

「保障しかねるわ。銃なんて使ったことないですもの」
仏頂面の日明と比べ、楓は薄く笑いながら語る。

余所見をしていた日明に、別の強盗が殴りかかるも あっさり

と『鬼神』は弾き飛ばした。

「撃たれたくなければ、止まり」

「チャツチャと殺しなさいと言っただはらずよ？」

「うぐ……………」

リーダー格の男の警告を無視し、楓は右手のナイフを閃かせる。あっさりと一閃を受け、男はその場に倒れこんだ。

「く、くそ……………！ おい、お前！ 立て！ こっちこい！！！」

「つつ!?!」

最後の一人が、強引に宗司を立たせる。銃を持った相手に、素人の宗司が抵抗など出来るはずもなく、そのまま銃器を頭につきつけられ、楓の前に立たされた。

けれども楓は、呆れた表情を見せた後

「はあ?.....あなた正気?」

心底、正気を疑うような声を発する。

異常は彼女の方のはずなのに、何故かこちらが責められているように感じる。

外から見ていただけではわからなかった。楓の言葉は.....彼女のもつ異様な気配は 辺りにいる人間を、恐怖させ、委縮させる。存在そのものが毒のようなものだ。

酒月 日明も十分危険だが、あれは「化物と対峙している恐怖」に近く、楓のソレとは似ているが、異なった。

「な、何を言ってるやが.....!」

強盗の言葉は、銃声にかき消された。

狂気から放たれる凶弾は、宗司の左肩を薄く決る。

(撃たれた.....?)

ゆつくりと、小さく衝撃が走った方へ、宗司が視線を向ける。

衝撃は熱を持った鈍痛へと変わり、痛みの震源地は朱に染まっていた。

(撃たれた.....!)

「うあああああああああああああああああつ!?!」

ようやく状況を飲み込めた彼の脳が、虚しく悲鳴を上げさせた。

驚愕と恐怖に彩られた学生を尻目に、彼女に狙われた男が、楓を睨みつけた。

「てめえ、こいつがどうなっても.....」

「いいに決まっているでしょ? そんなの当然じゃない」

「同じ学校のやつなんじゃねえのか!?!」

強盗の疑問に対し、さも当然そうに、楓は返す。

「わかってないわね、そんなことは関係ないの。知ってるとか知らないとか、好きだとか嫌いだとか、家族とかそうじゃないとか、全く関係ないのよ。何、簡単なことじゃない……他人が死んだところで、私が死ぬわけじゃないでしょう？」

「……！？ オイ！ 何言ってるやがる！？」

カチン！

再び彼女が引き金を引く。話など始めからする気などないらしい。カチカチ

弾が出ないのかわからないらしく、ひたすら彼女は引き金を引き続ける。

「ハハハ 弾切れかよ……」

危うく撃たれるところだった覆面男は、引き攣った笑みを浮かべる。

カチカチカチカチ

仕組みを理解していないのか、イラ立ちながら、撃鉄を空回りさせ続ける。

カチカチカチカチカチ

「お、おいテメエ……何やって」

「……貴方を殺そうとしてるのよ。これ壊れたの？ 弾が出ないのだけど……やっぱり、慣れない得物はダメね」

「ふ、ふざけっー！」

日常会話の気軽さで、犯人を挑発する楓。

男は激昂し、楓に銃口を向けて

二章―5 響く銃声（後書き）

作者「ヤバイ。超絶鬱ですね。ゲームやってるか妄想してないとやってらんない」

カエデ「妄想って……二次創作の方？」

作「いえ。こちらもしていました。でもだからって文章に出来るかは別という……」

カ「あらら……でもちゃんと書くとはしてるね」エライエライ」

作「そうですね……生み出した以上、ちゃんと完結させてやりたいものです。ちょっと大きな問題がありますが」

カ「えええ！？ 何！？ また別の作品でも書き出すの！？」

作「……本来のプロットが使えません。前にも書きましたが、ラスボスに使用させるつもりだった能力が、某小説とかぶってます。なもんで、終わりが見えていません。モチベーションに致命弾でしたな……あの事件は……」

カ「いやな事件だったけど、いつまでも引きずってても仕方ないよ」

作「ですよ。失踪はしたくないですな……グダグダでも、とりあえずいけるとこまで行くつもりなので、ゆっくり更新ですが、たまに見てやってください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7439o/>

広イセカイと狭イテノヒラ

2011年11月29日02時46分発行